

華夷変態の東アジア： 近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究

程 永 超

東北大学東北アジア研究センター・准教授

緒言―問題の所在―

16世紀までの中世とは異なり、17世紀から19世紀に至る近世には、日本（徳川幕府）と中国（明・清）との間には正式な国家間の外交関係が存在しなかった。近世の日中関係は、政治外交関係としてはかろうじて朝鮮王朝（以下、朝鮮）や琉球王国を介することで間接的なつながりを見出せるような非常に希薄な関係と考えられてきた。江戸幕府は「鎖国」下にあったと理解され、長崎、対馬、薩摩、松前の四ヶ所（日本近世史研究でいう「四つの口」）を介してのみ異国・異域との交流ができた。これを中国大陸の側から眺め直すと、中国は朝鮮や琉球を介することで日本との繋がりを保っていたといえる。このように、近世における日中関係は、間接的な政治関係しか持っていない点で他の時代にはない独特な関係であったのである。日本と中国の仲介者としての琉球王国については、琉球王国がやがて薩摩藩を通して日本の一部となったために、江戸時代における「独立王国」としての外交の実態、及び日本や中国との外交関係、またその文化交流など、日中両属についての研究が進みつつある。

一方で、この時代の朝鮮は中国にとってもっとも忠実な冊封国でありながら、日本とも交隣関係を結んでいた。しかし、琉球と比べて、朝鮮王国を介した日中関係はなかなか光が当たらなかった。その理由を一言で言えば、従来の研究では、一国史や二国間関係史の角度から当時の日朝関係や朝明関係、朝清関係等を描いてきたからである。日本における歴史研究は、日本史（昔は国史といった）、東洋史、西洋史の三つに分けておこわれてきた。日本史における近世対外関係史研究の多くは、一国史の延長線にあるものや日本と相手国との二国間関係史に限られている。そうした二国間関係を重視するために、日朝関係における第三国（明・清）の影響が十分に検討されてこなかった。さらに、東洋史における近世東アジア国際関係史研究の多くが、国際秩序が中国を中心として形成されていたと看做したために、上位に立つ朝

貢国（中国）と下位に置かれた冊封国（朝鮮など）との関係を論じる傾向にある。そこでは、蓄積された二国間関係（朝明関係／朝清関係、および日明関係／日清関係）の成果から説明することが一般的であるため、中国、中国の冊封を受けている朝鮮、中国の冊封を受けていない日本といった三国関係は、中国を中心として描かれた国際関係像にはほぼ出てこない。なお、これまでは、こうした近世に独特な日中関係を前提にして東アジア国際関係が論じられてきており、そもそもなぜこのような関係が構築されざるを得なかったのかという視点が欠如しているといっても過言ではない。

このような問題意識から、とりわけ見直される必要があるのが日朝関係史であり、そして両者の外交上の核であった通信使研究である。①これまでの通信使研究及び日朝関係史研究は、日本でも韓国でも二国間関係史の観点からのみ追究され、中国（明・清）が朝鮮王朝の宗主国であることに起因する間接的な影響を考察から除外してきた。②日朝関係史研究の現状では、日本と朝鮮と中国の三国を結び付ける動線がほとんど見えない。

研究方法

前述の通り、17～19世紀の東アジア国際関係史研究は、日本と朝鮮、日本と中国、中国と朝鮮といった二国間関係で成果が蓄積されてきた。そこで、本研究では、日朝関係史研究を基礎にしながら、それが同時代の日本と中国（明・清）との関係や中朝関係とどのように連関するのかを解明し、日朝関係で日本側の窓口であった対馬藩（宗家）と江戸幕府、朝鮮および中国の一次史料を比較検討した。

考 察

本研究の考察成果は次のように総括できる。

(1) 通信使と明清中国

まず、同一人物で通信使（朝鮮から日本へ）と燕行使（朝鮮から明清中国へ）という異なる外交使節を経験した者（重複経験者）に着目し、重複経験者のうち呉允謙と洪啓禧の二人を取り上げて、これら重複経験がその人の経歴や朝鮮王朝の政治・社会にどのような影響を及ぼしたかを明らかにした。呉允謙の場合、17世紀前期における通信使経験・燕行使経験が彼の経歴にどのような影響を及ぼしたかを明らかにした。17世紀初期の朝鮮では、通信使経験・燕行使経験が中央政界の地位上昇に大きく影響したこと、領議政（いわゆる総理大臣）のような重臣には国内だけでなく中国と日本への関心を持つことが必須であったことを明らかにした。18世紀の洪啓禧の場合、彼の通信使経験と燕行使経験を統合的に検討し、語学書の改修・再刊行と外交使行の関係を明らかにした。洪啓禧は1748年に通信使正使として日本へ使行した際、朝鮮王朝の訳官たちの語学能力の低下に気づき、その要因が日本語学習教科書の内容が現状に合わないほど古いことにあると考えて、日本語学習教科書の修訂・再刊行に取りかかった。それが契機となって、燕行使として中国に行く機会にも恵まれ、また中国語教科書の修訂・再刊行にも取り組むことになった。洪啓禧の通信使・燕行使双方の経験から、朝鮮における日本語・中国語の語学学習書の改修・再刊行すなわち朝鮮王朝の外国語教育にもたらした変化を明らかにした。

次に、倭情咨文という、朝鮮王朝が収集した日本情勢を清朝に報告した文書に注目した。その中には通信使の派遣・準備・帰国等の情報が含まれている。1607～1811年に至る12回の通信使に関わる倭情咨文を検討した結果、1655年次以後の通信使は、形式的には朝鮮王朝が宗主国清朝に対して派遣の可否などの意向を尋ねつつも、実質的には朝鮮王朝側が判断を下している事実が明らかとなる。とりわけ1655年次のものは、その後1811年まで繰り返される倭情咨文の基本形式を確立した点で画期となる。一方、1643年次の通信使は、清のホンタイジの実質的な意向を受けてから派遣が決定された。ホンタイジ在位中の3回の倭情咨文を分析することで、彼が在位中には一貫して日本に対する深い関心を抱いていたことがわかる。ホンタイジには通信使を活用して日本の情報を収集する目的があったこと、とりわけ1643年次通信使に際しては直接的な政治干渉すら見出せることを明らかにした。そこから朝鮮から日本に派遣された朝鮮通信使の背後に中国（清）の政治的影響力が潜んでい

ることを具体的に示した。

また、朝鮮通信使の来日時には筆談で意思疎通がなされたが、筆談を当該期日本の中国情報収集の必要性という観点から再検討した。そこでは、1811年次通信使を素材にして、当時の江戸幕府が中国北方情報を収集する必要性を強く感じていたこと、実際にそうした収集活動をおこなったことを論じた。従来は最後の通信使としてのみ理解されてきた1811年通信使（対馬易地聘礼）について、当時の東アジア国際情勢との関連から再考察した。これは1811年通信使を、18世紀末19世紀初頭における東アジア国際環境の急激な変化（近代化）への対応でもあった点に改めて注意を喚起するものである。通信使の筆談を介した中国大陸情報収集への関心は江戸時代を通じて幕府側に常に強くあり、それはそれぞれの時期ごとの東アジア国際的環境によって規定されたものである。

以上、近世期を通じて日朝外交の主軸と理解されていた通信使を、日朝関係の枠組みだけでなく、中国との関係にも注目し、東アジアの視野から新たな理解を加えた。

(2) 対馬藩と朝鮮・中国

貿易が外交に伴う中朝関係と違い、日朝関係においては外交（通信使）と貿易（倭館）は完全に分離した形で展開されていた。朝鮮朝廷が1715年に中朝貿易の八包貿易を対象に実施した銀の流通統制政策「八包定数」の厳格化に対して、1715年～1717年に朝鮮商人・倭学訳官が釜山倭館の対馬人に働きかけ、対馬から倭館を管理する東萊府使に対し、朝鮮商人と日本商人が協同して統制（流通の縮小）の阻止に動いた。この事例から、清と朝鮮と日本が「銀の路」によって結ばれていた事実を改めて明らかにするとともに、中朝貿易が対馬藩にとって必須であったことがわかる。中朝関係と日朝関係は、日常的な経済面でも連動していることを具体的に示した。さらに、中朝貿易は対馬藩にとってこそ必須であることが明らかになった。

近世日本は「四つの口」を通じて外の世界と繋がっており、海外の情報を入手していた。対馬や朝鮮を介して入ってきた大陸情報は、三藩の乱の時に特に顕著であった。対馬側にとっては、大陸情報の収集は、釜山に倭館を設置したときから、目的のひとつとしてあったが、その情報には虚実入り交じるものがあり、必ずしも全幅の信頼を置けるものではなかった。また、幕末期には、中国情報収集が対馬藩主にとって「御役職第一」と言えるほどに非常に重要な職務として挙げられるに至ったので

ある。

以上、長らく日朝関係の枠組みで研究されてきた対馬藩を、中朝関係との関連性にも注目し、東アジアの枠組みで見直してきた。

結 論

江戸時代の日本と中国（明清）との間には政治外交関係が結ばれなかったことは周知の事実である。しかしながら、その間、日本と中国の間で政治的なつながりが完全に断絶していたというわけではないのである。本研究を通じて、二国間関係史では見えなかった新たな歴史像、すなわち、①日中の間接的連繋性や日朝の背後に潜む中国の影響力、②朝鮮との交渉を委ねられた対馬藩の中国情報収集活動、③日朝および中朝貿易の関連性、④

中朝交渉に際して示された清の日本に対する関心、⑤直接交渉をしない日中関係を朝鮮が媒介する場面などが具体的に明らかとなった。本研究で明らかにしたのは、そのような日・朝・中の三国関係史である。

謝 辞

このたび荣誉ある三島海雲学術賞をいただきましたことに対し、理事長はじめ財団関係者の方々、選考委員の先生方、またご推薦いただきました東北大学東北アジア研究センター長千葉聡教授に厚く御礼申し上げます。またこれまで私の研究を支えてくださいました全ての方々に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

著者紹介



程 永超 (テイ エイチョウ)

〈略歴〉

2013年6月 中国・山東大学外国語学院 博士前期課程 修了
2018年3月 名古屋大学大学院文学研究科博士課程 修了
2018年4月 名古屋大学高等研究院YLC特任助教
2018年7月 韓国ソウル大学奎章閣韓国学研究院 フェロー
2020年10月 東北大学東北アジア研究センター 准教授
2024年3月 英国オックスフォード大学 客員研究員

〈研究テーマと抱負〉

専門分野：日本近世対外関係史、東アジア国際関係史
抱負：日本（特に江戸幕府と対馬藩）、朝鮮王朝、明清中国の各史料を比較して検討し、実証研究のアプローチとグローバル・ヒストリーの手法とを統合することにより、二国間関係を越えて東アジアの国際関係史の再構築を目指す。